

渡部菊郎著『トマス・アキナスにおける真理論』

創文社, 1997年, xiii + 344頁

長倉久子

渡部菊郎氏の『トマス・アキナスにおける真理論』は、「真理のあらわになる『場』としての人間の知性的な魂に定位して、トマスにおける真理の問題を考察する」(14頁)ことを目的として著されたものであり、「魂の本質からの第一真理への還帰という〈一つ〉の究極目的へ向かう全体としての一人の人間の〈はたらき・存在〉のために、人間は様々な〈諸能力〉をはたらかせる」(254頁)という視点に立って、トマスの全体系の中で〈真理〉はどのように理解され、どのような位置づけを与えられているかを明らかにしようとするものである。

真理とは何か、真理とは如何なる意味を持つものか、という問いは、極めて人間的な問いである。実際、第一真理なる神は誤り得ないものであり、また、人間以外の被造物について真理を問題にすることはない。もちろん、動物も植物も外敵から身を守るために擬態によって欺いたり、霊長類にあっては人間さながらの政治的駆け引きをすることはある。また、贗物の金や真珠に人間が騙されることもある。しかし、トマスが言うように、〈もの〉それ自身が騙すのではなく、〈もの〉それ自身に本物・贗物があるのでもない。真・偽/正・誤は、あくまでも判断する人間知性の問題である。それゆえ、トマスは、ものそれ自体の真理 (*veritas rei*) を肯定しながらも、本来の意味での真理は人間知性のうちに、しかも知性の判断するはたらきのうちにある (*S. T. I, q. 16, a. 2, c.*) とする。

ところで、渡部氏のこの書は、真理の問題を単なる認識の領域に止めるのではなく、上で引用したように、〈全体としての人間〉の問題として扱うところに、その独創性がある。従って、この書の至る所に、トマスの、そして著者の人間観が低奏通音の如く響いている。このトマスの、そして著者の人間観には二つの次元が重要な枠組みとして働いている。一つは聖書的な要素、つまり神の像としての人間の次元であり、

もう一つは、アリストテレス的な要素、つまり魂は生物学的な生命の根源であるとともに、それを超越する側面を持つという、〈魂の存在論的二面性〉(21頁以下)である。そして、この二つの要素のために、自然本性的傾向によって求める究極目的の達成の仕方が他の被造物とは異なって人間に固有のものであり、この達成の過程において〈真理〉が大きな意義を持つことを明らかにしている。

それゆえ、著者は、先ず第一部において、真理とは何か、どのような仕方で見出されるか、を人間の知性認識の構造から解き明かし(第1部第1・2章)、真なる知(学知)がいかんして獲得されるか、また伝達されるか(第3章)を論じ、次いで思弁的学知の区分と獲得、そして位相の相違を論じ(第4章)、更に進んで神学と形而上学における知(知恵)と、それがいかんして得られるかを明らかにしている(第5章)。

渡部氏の歩みは着実である。人間は本来、人間を超えて真理そのものなる神に向かい、神に何らかの仕方では到達することによって、自己の本来の目的を達成し至福を得る、という人間理解から出発し、真理とは何か、真理は如何なる仕方で見出されるかを論じ、思弁的知性の真理を区分した上で、最後に形而上学的真理の問題、学知と知恵の問題に進んで第1部を締め括っている。このような進め方の背後には、先に述べた著者の、つまりトマスの人間理解がある。すなわち著者は、神から出て神に戻るという視点で人間を捉え、真理の探求の最高の段階を形而上学と神学におき、そこで得られる学知、というよりもむしろ知恵、によって神への帰還を果たす、その帰還における真理の意味するところを明らかにしようとするのである。従って、著者がこの書を著したのは、〈ものと知性との合致・対等〉というスコラ(トマス)の真理の定義に関するカントやハイデッガーの批判に対して、トマスを弁護して、認識論的な次元と存在論的な次元から批判を加え、トマスの真理の定義の意味を明らかにするというに止まらず、むしろ人間学的な見地に立ってトマスの真理論を展開してみせるということを意図してであろう。然るに、「トマスは実践的な真理の問題について、取り立てて独立した問いを立てて考察していないし、主題的に論究している箇所も少なく、そのためもあろうか内外においてもほとんど研究されていないといってよい状況である」(12頁)から、この著書の独創性は、実践的な真理の問題を論じた第2部にある、と言ってもよいであろう。

第2部を始めるに当たり、渡部氏は、先ず、実践的な知性における真理が思弁的な

知性におけるような在り方をしないことをトマスによって明らかにする (135 頁以降)。すなわち、「思弁的な知性における真は〈ものに対する知性の合致〉に基づいて成立するが、思弁的な知性は、必然的なものに関してだけ不可謬な仕方では合致することができる」(135 頁)。他方、「実践的な知性における真は、……〈正しい欲求との合致〉に基づいて成立する。……そして、このような合致は……人間が行ったり制作したりすることのできる必然的でないことに関してのみ成立する」(136 頁)。こうして、知性を完成する徳には、思弁知性に関わる学知や知恵の他に実践知性に関わる知慮や技術知があると言う。著者の第 2 部の意図は、外的に善きものを作り出す技能である徳つまり技術知を扱うことではなく、「はたらくもの自身の内にとどまり、はたらくもの自身の完成を目的とするはたらき (行い) に関係する」(138 頁) 知慮に焦点を定め、「目的の〈正しい欲求〉とそれに合致する理性による目的への手だての推論の〈正しさ〉の「両方の正しさを兼ね備えた実践的な真理はどこに成立し、それを担う知慮はどのような性格を持つ徳なのか」(137 頁) を明らかにすることである。

「知慮は人間にとって必要不可欠な徳である」(S. T., I-II, q. 57, a. 5)。なぜなら、「善い生・善いはたらきのためには〈正しい目的〉の欲求と目的に向けて〈正しい・適切な〉手だてを選択することの両方が必要である……。そして、理性をそのように完成させる徳が知慮であり、また、この知慮は、技術知と異なり、よいはたらきをするための技能ばかりではなく、その技能の使用・行使をも善いものにすることにある」(139 頁) からである。「ただ生きるのではなく、人間として善く生きるためには、如何なるアレテーが必要であるか」というソクラテス以来の問いに、「知慮こそ必要不可欠の徳である」とトマスは答えている (Prudentia autem est necessaria homini ad bene vivendum, non solum ad hoc quod fiat bonus. S. T., *ibid.*, ad1)。人間として善く生きることは、幸福に生きる、或いは幸福を求めてそれに相応しく生きることには他ならない。人間はすべて、自然本性的に幸福を求めるとトマスはアリストテレスを承けて言う。この幸福への欲求は自然本性的傾向性として万人に共通であるが、幸福の、しかも究極目的である至福の達成には、様々な途がある。それゆえに人には様々な生のかたちがあるのであるが、それを可能にしているのは、究極目的を達成するための手段 (二次的目的) の選択の自由である。そして、その手段の選択肢を正しく或いは誤って選び取ることによって、幸福の達成に関して失敗や成功、達成度の違いといったものが生じてくる。こうしたことから「実践的な知性における真は、〈正

しい欲求との合致〉に基づいて成立する。……このような合致は……必然的でないことに関してのみ成立する」と言われていたのだった。従って、著者は第2部で、先ず、「実践的な理性の真理の問題が成立する場ともいえる人間的な自由の根底をトマスがどのように捉えているかを一般的に概観し、次に第2章で、第2部の課題である実践的な理性において問題となる〈未来の必然的でないもの〉に関するトマスの解答を本研究の視点から考察し、第3章以降で本論となる「知慮と実践的な理性の真理の問題を」(144頁)考察している。

ところでトマスは『神学大全』の第2部を「人間は神の像のごとくに造られたと言われるが、それは、〈像〉によって、知性的で意思決定に自由であり、主体的に行動できる、ということが意味されているからである」という序文をもって始めているが、この、人間は知性をもち意思決定に自由である、ということこそ、実践的な知性における真理の問題が生じてくる根源である。この実践的な知性における真理の問題は、今日の日本において、ますます大きな意味をもってきている。それは、かつてないほどの政治的・経済的・社会的自由を享受している我が国において、自由が自由として真の意味で行使されているとは言えず、自由によって究極目的である至福に到達するよりも、むしろ自由によって破滅に自らを追い込むような状況が見られるからである。それゆえ、渡部氏の研究はまことに時宜に適ったものと言えよう。しかし、最後に、一読者として著者に率直な感想を述べさせていただこう。既に花井氏も指摘しておられるように(『創文』1997, 08, 399号24頁)、本書の難点は文章の硬さである。硬さと読みずらさの原因はいくつかあろうが、一つを挙げれば、例えば〈なかぐろ〉である。随所に用いられているなかぐろの意味が一定でなく(そして、或いは、すなわち、など)、読者はその都度その意味を推察しなければならない。訳語の揺れや言い換えは原語の有つ豊かな意味合いを伝えようと工夫を凝らしていることから来るのであろうが、読者にとっては煩雑で難解になっているのが残念である。これに反し、補遺として収められている「アウグスティヌスの『教師論』」と「エックハルトにおける存在と知性認識」は文章が読みやすく、読後感は爽快であった。

末尾になったが、筆者の怠慢と様々な雑事に妨げられてこんなにも時間がかかり遅くなったことを、著者と本誌の編集委員の先生方に心からお詫びして、この拙い書評を終えたい。